



三千五百円



福田鼠

その休日の始め。財布の中には五千円札が一枚あった。

フリーターでやりくりして困ることって言えば、オレの場合、女のことで。お前フリーターじゃなくたって、どうせモテないよ、って、ああ、うるさい。スーパーカブの鍵を回す。

そりゃ、モテはしないさ。それでも、デートの金にも、時間にも悩まなくちゃいけないかもしれない、そんな男と付き合っ、女は何が楽しいんだ。ほら、今日は、女を抱くには良い寒さじゃないか。

冷えた体が温まる。

お湯で暖めるってのは、どうしたって誤差が出る。人間の体温にぴったり合わせるなんてどうしたって不可能だ。でも、女の肌はどんなことがあっても人肌の温度。

それにしたって、風に当たるとちょっと寒すぎやしないか。戻るなら今さ。週に一日の全休を、あんな心が廃れるような場所、普段ならその通りさえ歩きたくない、おっさんに声をかけられるのすら気分の悪い。そんなところで潰すなんざ。半休なら週に二日は絶対にあるじゃないか。あの日に行くんだ。そして、そこで使った分を夜の労働でチャラにすれば良いじゃないか。

そうだ、そういう考えがオレに全休の今日を選ばせたのか。ただ、ゆっくりと、贅沢の限りを尽くして、女を抱きたい。夜のバイトの始まる時間も、それでいくら稼ぎ直さなくちゃいけないかなんて野暮な考えも。

だから、朝から晩まで働いて疲れた体でパソコン開いて、値段比べて。

三千五百円で、三十分おっぱい揉み放題。

眠い目こすって、店の住所をコピーして、地図を検索して、ケータイのカメラで撮って。

だけど、そこを右折すれば、珈琲屋があるじゃないか。

あそこの珈琲は美味しい。四百円であの珈琲を飲める。そして、千円で二百グラム豆を買って、中古レコード屋に寄る。久々にレコードの針でも落とそう。針も買って、変えたいけど、それはちょっとした贅沢になっちゃう。良いさ。ノイズもレコードのたしなみだと思って聴こう。

それでも、スーパーカブは直進するわけだ。真っ直ぐあの店に向かうんだ。

いや、そういうわけじゃない。

そう、この先には母校がある。

母校の制服の女ってのは良いもんだ。オレの心があの店に求めているような下らない性欲じゃない。そこには思い出がある。過去がある。でも、確かにちょっとエッチな気持ちだってある。それは認める。

ただ、オレはあの女子高生たちを見たいんだ。パンツでもないし、ふとももでもない、揺れる黒髪でもない。制服でもない。

それらが全て集まった、あの女子高生を見たい。

そう、分かってはいたんだ。やっぱり、オレは母校を過ぎても引き返しも、右折もしなかった

。

それにしても、こんな時に金を使っちゃう馬鹿がどこにあるんだ。

また、引っ越しが一ヶ月延びることになるんだぞ。

実家に二万払えど、食費、家賃、電気代、全てそれだけで賄う馬鹿げた生活がどこにあるっていうんだ。

実のところ、親だって二万はありがたいのかもしれない。

だけど、親は不動産屋でもないし、大家でもないんだ。

「息子の払う金ありがたい」

or

「息子は正職にこそ就いていないが、きちんと自活できる大人になっている。何か考えあってフリーター、いや、それは分からないにせよ、自活している人間をどうこうは言えない。息子も大人になった」

そりゃ、親なんだ。一人の人間であり、オレの親なんだ。

それでも、たかだか三千五百円。

良いか。月の小遣いが五百円のガキじゃないんだ。

気にすることはない。

珈琲、豆、レコード、途中での缶コーヒー、そいつらを我慢する代わりに女を抱く。

女への欲求はどうにもならないんだ。なぜって、オレは男だから。珈琲どもは我慢が効くんだ。

。

ああ、ベストは真っ直ぐ図書館に行くことさ。百二十円だけは許してやる。あと、普段働いている日より、五本多く煙草を吸うのも許可してやる。

でも、それは無理さ。

オレは休日をそんな良い子には過ごせない。あの店に行かなくたって、美味しい珈琲は避けられない。豆も無理さ。どうして、そこでレコードだけ助かるっていうんだ。

もしも、あの店が五百円だったら。

オレは迷わずあの店に行けるだろう。

いや、本当か。

もし、五百円でも、オレは今と同じように考えるんじゃないだろうか。

だいたい、女を金で買うなんてことが許されるだろうか。いや、女じゃなくとも、人間を、だ。

オレは腹が立ったじゃないか。

「お前も今度一緒に行こうぜ。向こうなら、結構綺麗な女を一晩三千円で買えて、入れても良いんだぜ。で、観光してさ。外国って良いぜ、価値観変わるよ。いろんなところでな。まあ、問題はおいかな。日本人は男でも女でもおいて気にするからさ、抱いててもだいたい嫌なにおいでないだろ。でも、向こうはやっぱりちょっとな。でも、それは文化の違いって事で。それに、おいを差し引いても絶対満足できるって。エアーも格安の便で行けば安いさ。まあ、

気を付けるのはビョーキくらいか」

自分の足が原付の車輪に巻き込まれたとして、オレは働けなくなって、仮に体を売るようなそういう仕事をしないと生きていけなくなって、そんなことは有り得ないけど、そんなことになったとして。

オレはそう考えると、あいつが本当に憎たらしくなって、本当に顔に唾でも吐きかけたくなった。でも、オレはにこにこ笑って、あいつの指示を聞いて金を稼いだ。

金の問題じゃないだろう。

でも、仮にの話さ。五百円であの店に行ける世の中になれば、きっと、みんな、それこそ珈琲を飲みに行くような感じであの店に行くのさ。

そうなれば、働いているやつらだって、大した給料じゃないのにそこで働く、言うなれば有志の連中、あれが好きなのやつらだけさ。

それなら、オレは行っても良いだろう。

そうさ。あそこで働いている連中は、実のところ、今だって有志の連中さ。発展途上国じゃないんだ。明日の飯のためにあそこで働いているんじゃない。あいつらは、バッグ、財布、アクセサリー、そんなもののために働いているだけさ。

そうさ。だから、多くの人があのに足を運ぶ。それは随分昔から続いていることで、そういう女と、そういう男の間には暗黙の了解が成立しているってことなんだ。

決して気にすることはないんだ。

それでも、まだ間に合う。

ウィンカーを消すんだ。そして、この信号が青になっても左折せずに直進だ。少し先のコンビニで煙草と缶コーヒーを買おう。さらに真っ直ぐ行って、海を眺めて帰ろうじゃないか。あの店には行かずに、オレは今日を終えるんだ。 だって、そうじゃないか。

どんなことを言っても、あの店に行かない男ってのはいくらでもいるんだ。

そいつらは綺麗事を言ってるのか。

金が惜しいのか。

違うさ。良心に従ってるってだけだろう。

もし、仮にだ。人を殺しても罪にならない。誰も責めはしない。そんな世の中になったって、きっとオレは人を殺したいとは思わない、いや、間違いなく人を殺したいとは思わない。

あの時代には戦争に行って異国の人を殺すのは愛国心のあることだった。それでも、誰もが本心から引き金を引いて楽しむことはなかった。

そうさ。人間には良心がある。

でも、スーパーカブは左折する。

オレは観念した。

良いじゃないか、今日くらい。

単に膝の上に女を乗せて、おっぱいを揉んで、キスするだけさ。愛しの母校の女子高生をレイプするわけじゃないんだ。 さあ、楽しんじゃおう。 そら、この汚い狭い道と、オレの中古のス

ーパーカブはどこか良い雰囲気さえ醸し出しているじゃないか。

鍵を抜いた瞬間だった。

もはや、オレの足をあの店から遠ざける心は驚くほどに消え去ってしまった。一瞬にして蒸発してしまっただけで済んだって過言じゃない。

ただ、溜まった性欲、貧乏暮らしのねじけた心、そいつらが手を取って、賛美歌を歌った。「人間が欲求を満たすことは素晴らしいことだ。さらなる欲求のために、お前は明日も一生懸命に生きる。今こそだ。今こそお前は人間性を獲得するのだ」 賛美歌のくせに、そいつらは、カホーンを叩いてフラメンコのステップを踏んで、オレは煙草に意気揚々と火を付ける。

ああ、危なかった。

ちょうど煙草がなくなった。

女の肌を抱けるのに、煙草なしとは。愛している女じゃできない至福の一服を逃すなんざ、これほど馬鹿なことはないぜ。

そこを曲がったところに自販機があったろう。焦っちゃいけないさ。

「おっさん、金出せよ」

金髪の少年が言う。

「いや、持っていないよ」

「嘘付くなよ。おっさんが一人でこの辺歩いてて金がないわけないだろ」

やたらとダボダボのバスケのユニフォームを着た少年。

「いや、本当だ。家が近所なだけだ」

「もう良いじゃん、やっちゃおうよ。免許証とかあったら、けっこう引っ張れるしさ」

黒髪の女が言う。一番背が高かった。何より美人だった。しかし、少女だった。

少年二人の目が変わったように見えた。

大声を出して、人を呼ぼう。誰かいるだろう。客引きの男が一人くらいはいるはずだ。

「現金だけで勘弁して下さい」

意に反して、オレはポケットから財布を出し、五千円札を抜いて少女の方に真っ直ぐ差し出した。手が震えていた。

金髪の少年が横から驚掴みにして言った。

「てめえ、これだけかよ」

自分の足が震えているのがよく分かった。

「そりゃ、平日の昼間だからね。良いじゃない」

黒髪の少女が優しい声で言った。

「ね、おじさん、もう行っても良いよ」

こういう女と寝てみたいと思わせるような声だった。

原付に乗った途端に涙が出た。

こんな積もりじゃなかった。

何もかもがこんな積もりじゃなかった。

オレは女を愛したかった。ただ、それだけだ。

ただ、オレには金が無かった。余裕がなかった。一人の女を真っ直ぐに愛して責任を持てるだけの。

ただ、同時に、オレは金をたくさん稼ぎたいとも思えなかった。金は欲しかった。だけど、オレはゆっくりとレコードを聞いて、本を読めるだけの金があれば十分で、それ以上の金よりは、それをゆっくりと楽しめるだけの時間が欲しかった。馬車馬のように働いて、預金残高を大事に愛して、にこにこした女と結婚して、マイホーム、ゴールデンレトリバー、娘にはピアノ、息子とキャッチボール、ゲートボール、そこまで上出来の人生には興味が出なかった。いや、興味はあったけど、オレは馬車馬じゃない。オレは金持ちじゃなくっても、レコードに美味しい珈琲が好きな自分を愛してくれる女性と生きたいと考えた。

そして、どうしたって男は性欲には勝てないところがある。

こんな涙を流しているオレにこそ、オレは悲しかった。涙腺を切り開いて、涙のもとをごっそり取り出して、代わりに豆を詰めよう。珈琲が、美味しい珈琲が止めどなく溢れ出るように。

その休日の終わり、男の財布には一円も無かった。

(了)

三千五百円

<http://p.booklog.jp/book/24801>

著者：福田鼠

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tyorori/profile>

発行所：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24801>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24801>